開扉一妖帖

泉鏡花

ただ仰向けに倒れなかったばかりだったそうである、松村信也氏――こう真面目に名のったのでは、この話の模様だと、御当人少々極りが悪いかも知れない。信也氏は東――新聞、学芸部の記者である。

何しろ……胸さきの苦しさに、ほとんど前後を忘じたが、あとで注意すると、環海ビルジング――帯暗白堊、五階建の、ちょうど、昇って三階目、空に聳えた滑かに巨大なる巌を、みしと切組んだようで、芬と湿りを帯びた階段を、その上へなお攀上ろうとする廊下であった。いうまでもないが、このビルジングを、礎から貫いた階子の、さながら只中に当っていた。

浅草寺観世音の仁王門、芝の三門など、あの真中(まんなか)を正面に切って通ると、怪異がある、魔が魅(さ)すと、言伝える。偶然だけれども、信也氏の場合は、重ねていうが、ビルジングの中心にぶつかった。

また、それでなければ、行路病者のごとく、こんな壁際に踞(しやが)みもしまい。……動悸(どうき)に波を打たし、ぐたりと手をつきそうになった時は、二河白道(にがびやくどう)のそれではないが――石段は幻に白く浮いた、卍(まんじ)の馬の、片鐙(かたあぶみ)をはずして倒(さかさま)に落ちそうにさえ思われた。

いや、どうもちっと大袈裟(おおげさ)だ。信也氏が作者に話し

たのを直接に聞いた時は、そんなにも思わなかった。が、ここに書きとると何だか誇張したもののように聞こえてよくない。もっとも読者諸賢に対して、作者は謹んで真面目である。処を、信也氏は実は酔っていた。宵から、銀座裏の、腰掛ではあるが、生灘（きなだ）をはかる、料理が安くて、庖丁の利く、小皿盛の店で、十二三人、気の置けない会合があって、狭い卓子（テエブル）を囲んだから、端から端へ杯が歌留多（かるた）のようにはずむにつけ、店の亭主が向顱巻（むこうはちまき）で気競（きそ）うから菊正宗の酔（えい）が一層烈（はげ）しい。

——松村さん、木戸まで急用——

いけ年（どし）を仕（つかまつ）った、学芸記者が馴（な）れない軽口の逃口（にげ）

上で、帽子を引湊(ひっさら)うと、すっとは出られぬ、ぎっしり詰合って飲んでいる、めいめいが席を開き、座を立って退口(のきぐち)を譲って通した。――「さ、出よう、遅い遅い。」悪くすると、同伴(つれ)に催促されるまで酔潰(よいつぶ)れかねないのが、うろ抜けになって出たのである。どうかしてるぜ、憑(つき)ものがしたようだ、怪我(けが)をしはしないか、と深切なのは、うしろを通して立ったまま見送ったそうである。

が、開き直って、今晩は、環海ビルジングにおいて、そんじょその辺の芸妓(げいしゃ)連中、音曲のおさらいこれあり、頼まれました義理かたがた、ちょいと顔を見に参らねばなりませぬ。思切って、ぺろ兀(はげ)の爺(じい)さんが、肥(ふと)った

若い妓（こ）にしなだれたのか、浅葱（あさぎ）の襟をしめつけて、雪駄（せった）をちゃらつかせた若いものでないと、この口上は——しかも会費こそは安いが、いずれも一家をなし、一芸に、携わる連中に——面と向っては言いかねる、こんな時に持出す親はなし、やけに女房が産気づいたと言えないこともないものを、臨機縦横の気働きのない学芸だから、中座の申訳に困り、熱燗（あつかん）に舌をやきつつ、飲む酒も、ぐッぐと咽喉（のど）へ支（つか）えさしていたのが、いちどきに、赫（かっ）となって、その横路地から、七彩の電燈の火山のごとき銀座の木戸口へ飛出した。

たちまち群集の波に捲（ま）かれると、大橋の橋杭（はしぐい）に打衝（ぶッつか）

るような円タクに、

「――環海ビルジング」

「――もう、ここかい――いや、御苦労でした――」

おやおや、会場は近かった。土橋寄りだ、と思うが、あの華やかな銀座の裏を返して、黒幕を落したように、バッタリ寂しい。……大きな建物ばかり、四方に聳立した中にこの仄白いのが、四角に暗夜を抽いた、どの窓にも光は見えず、靄の曇りで陰々としている。――場所に間違いはなかろう――大温習会、日本橋連中、と門柱に立掛けた、字のほかは真白な立看板を、

白い電燈で照らしたのが、清く涼しいけれども、もの寂しい。四月の末だというのに、湿気を含んだ夜風が、さらさらと辻惑いに吹迷って、卯の花を乱すばかり、颯と、その看板の面を渡った。

扉を押すと、反動でドンと閉ったあとは、もの音もしない。正面に、エレベエタアの鉄筋が……それも、いま思うと、灰色の魔の諸脚の真黒な筋のごとく、二ケ処に洞穴をふんで、冷く、不気味に突立っていたのである。

——まさか、そんな事はあるまい、まだ十時だ——

が、こうした事に、もの馴れない、学芸部の了簡で

は、会場にさし向う、すぐ目前、紅提灯(べにぢょうちん)に景気幕か、時節がら、藤、つつじ。百合、撫子(なでしこ)などの造花に、碧紫(あおむらさき)の電燈が燦然(さんぜん)と輝いて——いらっしゃい——受附でも出張(でば)っている事、と心得違いをしていたので。どうやら、これだと、見た処、会が済んだあとのように思われる。

——まさか、十時、まだ五分前だ——

立っていても、エレベエタアは水に沈んだようで動くとも見えないから、とにかく、左へ石梯子(いしばしご)を昇りはじめた。元来慌てものせっかちの癖に、かねて心臓が弱くて、ものの一町と駆出すことが出来ない。かつ

て、彼の叔父に、ある芸人があったが、六十七歳にして、若いものと一所に四国に遊んで、負けない気で、鉄枴（てっかい）ケ峰へ押昇って、煩って、どっと寝た。

聞いてさえ恐れをなすのに——ここも一種の鉄枴ケ峰である。あまつさえ、目に爽（さわや）かな、敷波の松、白妙（しろたえ）の渚（なぎさ）どころか、一毛の青いものさえない。……草も木も影もない。まだ、それでも、一階、二階、はッはッ肩で息ながら上るうちには、芝居の桟敷裏（さじきうら）を折曲げて、縦に突立（つった）てたように——芸妓（げいしゃ）の温習（おさらい）にして見れば、——客の中（うち）なり、楽屋うちなり、裾模様（すそもよう）を着けた草、櫛（くし）さした木の葉の二枚三枚は、廊下へちらちらちらとこぼれ

て来よう。心だのみの、それが仇《あだ》で、人けがなさ過ぎると、虫も這《は》わぬ。

心は轟《とどろ》く、脈《みゃく》は鳴る、酒の酔《えい》を円タクに蒸されて、汗ばんだのを、車を下りてから一度夜風にあたった。息もつかず、もうもうと四面《まわり》の壁の息《におい》を吸って昇るのが草いきれに包まれながら、性の知れない、魔ものの胴中《どうなか》を、くり抜きに、うろついている心地がするので、たださえ心臓の苦しいのが、悪酔に嘔気《はきけ》がついた。身悶《みもだ》えをすれば吐《つ》きそうだから、引返《ひっかえ》して階下《した》へ抜けるのさえむずかしい。

突俯《つっぷ》して、（ただ仰向《あおむ》けに倒れないばかり）であった

——
で、背くぐみに両膝を抱いて、動悸（どうき）を圧（おさ）え、潰（つぶ）された蜘蛛（くも）のごとくビルジングの壁際に踞（しゃが）んだ処は、やすものの、探偵小説の挿画（さしえ）に似て、われながら、浅ましく、情（なさけ）ない。

「南無（なむ）、身延様（みのぶさま）——三百六十三段。南無身延様、三百六十四段、南無身延様、三百六十五段……」

もう一息で、頂上の境内という処だから、団扇太鼓（うちわだいこ）もだらりと下げて、音も立てず、千箇寺（せんがじ）参りの五十男が、口で石段の数取りをしながら、顔色も青く喘（あえ）ぎ喘

ぎ上るのを——下山の間際に視（み）たことがある。

思出す、あの……五十段ずつ七折ばかり、繋（つな）いで掛け、雲の桟（かけはし）に似た石段を——麓（ふもと）の旅籠屋（はたごや）で、かき玉の椀に、きざみ昆布のつくだ煮か、それはいい、あろう事か、朝酒を煽（あお）りつけた勢（いきおい）で、通しの夜汽車で、疲れたのを顧みず——時も八月、極暑に、矢声を掛けて駆昇った事がある。……

呼吸（いき）が切れ、目が眩（くら）むと、あたかも三つ目と想う段の継目の、わずかに身を容（い）るるばかりの石の上へ仰ぎ倒れた。胸は上の段、およそ百ばかりに高く波を打ち、足は下の段、およそ百ばかりに震えて重い。いまにも

胴中から裂けそうで、串戯どころか、その時は、合掌に胸を緊めて、真蒼になって、日盛の蚯蚓でのびた。叔父の鉄枴ケ峰ではない。身延山の石段の真中で目を瞑ろうとしたのである。

上へも、下へも、身動きが出来ない。一滴の露、水がなかった。

酒さえのまねば、そうもなるまい。故郷も家も、くるくると玉に廻って、生命の数珠が切れそうだった。が、三十分ばかり、静としていて辛うじて起った。——もっともその折は同伴があって、力をつけ、介抱した。手を取って助けるのに、縋って這うばかりにして、

辛うじて頂上へ辿（たど）ることが出来た。立処（たちどころ）に、無熱池の水は、白き蓮華（れんげ）となって、水盤にふき溢（あふ）れた。

——ああ、一口、水がほしい——

実際、信也氏は、身延山の石段で倒れたと同じ気がした、と云うのである。

何より心細いのは、つれがない。樹の影、草の影もない。噛（か）みたいほどの雨気（あまけ）を帯びた辻の風も、そよとも通わぬ。

……その冷く快かった入口の、立看板の白く冴（さ）えて寂しいのも、再び見る、露に濡れた一叢（ひとむら）の卯（う）の花の水の栞（しおり）をすると思うのも、いまは谷底のように遠く、深

い。ここに、突当りに切組んで、二段ばかり目に映る階段を望んで次第に上層を思うと、峰のごとく遥(はるか)に高い。

気が違わぬから、声を出して人は呼ばれず、たすけを、人を、水をあこがれ求むる、瞳ばかり睜(みは)ったが、すぐ、それさえも茫(ぼう)となる。

その目に、ひらりと影が見えた。真向うに、矗立(ちくりつ)した壁面と、相接するその階段へ、上から、黒く落ちて、鳥影のように映った。が、羽音はしないで、すぐその影に薄(うっす)りと色が染まって、婦(おんな)の裾(すそ)になり、白い蝙蝠(こうもり)ほどの足袋が出て、踏んだ草履の緒が青い。

翼に藍鼠（あいねずみ）の縞（しま）がある。大柄なこの怪しい鳥は、円髷（まるまげ）が黒かった。

目鼻立ちのばらりとした、額のやや広く、鼻の隆（たか）いのが、……段の上からと、廊下からと、二ヶ処の電燈のせいか、その怪しい影を、やっぱり諸翼（もろは）のごとく、両方の壁に映しながら、ふらりと来て、朦朧（もうろう）と映ったが、近づくと、こっちの息だか婦（おんな）の肌の香（かおり）だか、芬（ぷん）とにおって酒臭い。

「酔ってますね、ほほほ。」

蓮葉（はすは）に笑った、婦（おんな）の方から。——これが挨拶（あいさつ）らしい。

が、私が酔っています、か、お前さんは酔ってるね、

だか分らない。

「やあ。」

と、渡りに船の譬喩（たとえ）も恥かしい。水に縁の切れた糸瓜（へちま）が、物干の如露（じょろ）へ伸上るように身を起して、

「――御連中ですか、お師匠……」

と言った。

薄手のお太鼓だけれども、今時珍らしい黒繻子（くろじゅす）豆絞りの帯が弛（ゆる）んで、一枚小袖もずるりとした、はだかった胸もとを、きちりと紫の結目（むすびめ）で、西行法師――いや、大宅光国（おおやけみつくに）という背負方（しょいかた）をして、樫（かし）であろう、手馴（てな）れて研ぎのかかった白木の細い……所作、稽古（けいこ）の棒をつい

ている。となりの乱れた容子が、長刀に使ったか、太刀か、刀か、舞台で立廻りをして、引込んで来たもののように見えた。

ところが、目皺を寄せ、頬を刻んで、妙に眩しそうな顔をして、

「おや、師匠とおいでなすったね、おとぼけでないよ。」

とのっけから、

「ちょいと旦那、この敷石の道の工合は、河岸じゃありませんね、五十間。しゃっぽの旦那は、金やろかいじゃあない……何だっけ……銭とるめんでしょう、その口から、お師匠さん、あれ、恥かしい。」

と片袖をわざと顔にあてて俯向(うつむ)いた、襟が白い、が白粉(おしろい)まだらで。……

「……風体を、ごらんなさいよ。ピイと吹けば瞽女(ごぜ)さあね。」

と仰向けに目をぐっと瞑(つむ)り、口をひょっとこにゆがませると、所作の棒を杖(つえ)にして、コトコトと床を鳴らし、めくら反(ぞ)りに胸を反らした。

「按摩(あんま)かみしも三百もん――ひけ過ぎだよ。あいあい。」

あっと呆気(あっけ)に取られていると、

「鉄棒(かなぼう)の音に目をさまし、」

じゃらんとついて、ぱっちりと目を開いた。が、わが信也氏を熟（じっ）と見ると、

「おや、先生じゃありませんか、まあ、先生。」

「…………」

「それ……と、たしか松村さん。」

心当りはまるでない。

「松村です、松村は確かだけれど、あやふやな男ですがね、弱りました、弱ったとも弱りましたよ。いや、何とも。」

上脊があるから、下にしゃがんだ男を、覗（のぞ）くように傾いて、

「どうなさいました、まあ。」
「何の事はありません。」
鉄枴ヶ峰では分るまい……
「身延山の石段で、行倒れになったようなんです。口も利けない始末ですがね、場所はどこです、どこにあります、あと何階あります、場所は、おさらいの会場は。」
「おさらい……おさらいなんかありませんわ。」
「ええ。」
ビルジングの三階から、ほうり出されたようである。
「しかし、師匠は。」

「あれさ、それだけはよして頂戴よ。ししょう……もようもない、ほほほ。こりや、これ、かみがたの口合（くちあい）や。」

と手の甲で唇をたたきながら、

「場末の……いまの、ルンならいいけど、足の生えた、ぱんぺんさ。先生、それも、お前さん、いささかどうでしょう、ぷんと来た処をふり売りの途中、下の辻で、木戸かしら、入口の看板を見ましてね、あれさ、お前さん、ご存じだ……」

という。が、お前さんにはいよいよ分らぬ。

「鶏卵と、玉子と、字にかくとおんなじというめくら

だけれど、おさらいの看板ぐらいは形でわかりますからね、叱られやしないと多寡（たか）をくって、ふらふらと入って来ましたがね。おさらいや、おおさえや、そんなものは三番叟（さんばそう）だって、どこにも、やってやしませんのさ。」

「はあ。」

とばかり。

「お前さんも、おさらいにおいでなすったという処で見ると、満ざら、私も間違えたんじゃアありませんね。ことによったら、もう刎（は）ねっちまったんじゃありませんか。」

さあ……
「成程、で、その連中でないとすると、弱ったなあ。……失礼だが、まるっきりお見それ申したがね。」
「ええ、ええ、ごもっとも、お目に掛《かか》ったのは震災ずっと前でござんすもの。こっちは、商売、慾張《よくば》ってますから、両三度だけれど覚えていますわ。お分りにならない筈《はず》……」
と無雑作な中腰で、廊下に、斜《ななめ》に向合った。
「吉原の小浜屋（引手茶屋）が、焼出されたあと、仲之町《なかのちょう》をよして、浜町《はまちょう》で鳥料理をはじめました。それさ、お前さん、鶏卵と、玉子と同類の頃なんだよ。

京千代さんの、鴇（とき）さんと、一座で、お前さんおいでなすった……」

「ああ、そう……」

夢のように思出した。つれだったという……京千代のお京さんは、もとその小浜屋に芸妓（げいしゃ）の娘分が三人あった、一番の年若で。もうその時分は、鴇の細君であった。鴇氏――画名は遠慮しよう、実の名は淳之助（じゅんのすけ）である。

（――つい、今しがた銀座で一所に飲んでいた――）

この場合、うっかり口へ出そうなのを、ふと控えたのは、この婦（おんな）が、見た処の容子だと、銀座へ押掛けよ

うと言いかねまい。……

そこの腰掛では、現に、ならんで隣合った。画会では権威だと聞く、厳しい審査員でありながら、厚ぼったくなく、もの柔にすらりとしたのが、小丼のもずくの傍で、海を飛出し、銀に光る、鰹の皮づくりで、静に猪口を傾けながら、

「おや、もう帰る。」信也氏が早急に席を出た時、つまの蓼を真青に噛んで立ったのがその画伯であった。

「ああ、やっと、思出した……おつまさん。」

「市場の、さしみの……」

と莞爾（にっこり）する。

「おさらいは構わないが、さ、さしあたって、水の算段はあるまいか、一口でもいいんだが。」

「おひや。暑そうね、お前さん、真赤（まっか）になって。」

と、扇子（おうぎ）を抜いて、風をくれつつ、

「私も暑い。赤いでしょう。」

「しんは青くなっているんだよ……息が切れて倒れそうでね。」

「おひや、ありますよ。」

「有りますか。」

「もう、二階ばかり上の高い処に、海老屋（えびや）の屋根の天

水桶（おけ）の雪の遠見ってのがありました。」

「聞いても飛上りたいが、お妻さん、動悸（どうき）が激しくって、動くと嘔きそうだ。下へもおりられないんだよ。恩に被（き）るから、何とか一杯。」

「おっしゃるな。すぐに算段をしますから。まったく、いやに蒸すことね。その癖、乾き切ってさ。」

とついと立って、

「五月雨の……と心持でも濡れましょう。池の菰（まこも）に水まして、いずれが、あやめ杜若（かきつばた）、さだかにそれと、よし原に、ほど遠からぬ水神へ……」

扇子（おうぎ）をつかって、トントンと向うの段を、天井の巣

へ、鳥のようにひらりと行く。一あめ、さっと聞くおもい、なりも、ふりも、うっちゃった容子の中(うち)に、争われぬ手練(てだれ)が見えて、こっちは、吻(ほっ)と息を吐(つ)いた。……

——踊が上手(うま)い、声もよし、三味線(さみせん)はおもて芸、下方(したかた)も、笛まで出来る。しかるに芸人の自覚といった事が少しもない。顔だちも目についたが、色っぽく見えない処へ、媚(なまめか)しさなどは気(け)もなかった。その頃、銀座さんと称(とな)うる化粧問屋の大尽(だいじん)があって、新(あらた)に、「仙牡丹(せんぼたん)」という白粉(おしろい)を製し、これが大当りに当った、祝と披露を、枕橋(まくらばし)の八百松(やおまつ)で催した事がある。

裾(すそ)を曳(ひ)いて帳場に起居(たちい)の女房の、婀娜(あだ)にたおやかなのがそっくりで、半四郎茶屋と呼ばれた引手茶屋の、大尽は常客だったが、芸妓(げいしゃ)は小浜屋の姉妹(きょうだい)が一の贔屓(ひいき)だったから、その祝宴にも真先(まっさき)に取持った。……当日は伺候(しこう)の芸者大勢がいずれも売出しの白粉の銘、仙牡丹に因(ちな)んだ趣向をした。幇間(ほうかん)なかまは、大尽客を、獅子(しし)に擬(なぞら)え、黒牡丹と題して、金の角の縫いぐるみの牛になって、大広間へ罷出(まかりい)で、馬には狐だから、牛に狸が乗った、滑稽(おどけ)の果(はて)は、縫ぐるみを崩すと、幇間同士が血のしたたるビフテキを捧げて出た、獅子の口へ、身を牲(にえ)にして奉った、という生命(いのち)を賭(と)した、奉仕(サアビス)であ

る。

（——同町内というではないが、信也氏は、住居（すまい）も近所で、鴾画伯とは別懇だから、時々その細君の京千代に、茶の間で煙草話に聞いている——）

小浜屋の芸妓姉妹は、その祝宴の八百松で、その京千代と、——中の姉のお民（たみ）——（これは仲之町を圧して売れた。）——小股（こまた）の切れた、色白なのが居て、二人で、囃子（はやし）を揃えて、すなわち連獅子（れんじし）に骨身を絞ったというのに——上の姉のこのお妻はどうだろう。興酣（たけなわ）なる汐時（しおどき）、まのよろしからざる処へ、田舎の嬶々（かかあ）の

肩手拭(かたてぬぐい)で、引端折り(ひっぱしょり)の蕎麦(そば)きり色、草刈籠(くさかりかご)のきりだめから、へぎ盆に取って、上客からずらりと席順に配って歩行(ある)いて、「くいなせえましょう。」と野良声を出したのを、何だとまあ思います？

（――鴾の細君京千代のお京さんの茶の間話に聞いたのだが――）

つぶし餡(あん)の牡丹餅(ぼたもち)さ。ために、浅からざる御不興を蒙(こうむ)った、そうだろう。新製売出しの当り祝につぶしは不可(いけな)い。のみならず、酒宴の半ばへ牡丹餅は可笑(おか)し

い。が、すねたのでも、諷(ふう)したのでも何でもない、かのおんなの性格の自然に出でた趣向であった。

……ここに、信也氏のために、きつけの水を汲(く)むべく、屋根の雪の天水桶を志して、環海ビルジングを上りつつある、つぶし餡のお妻が、さてもその後、黄粉か、胡麻(ごま)か、いろが出来て、日光へ駆落ちした。およそ、獅子大じんに牡丹餅をくわせた姉さんなるものの、生死(いきしに)のあい手を考えて御覧なさい。相撲か、役者か、渡世人か、いきな処で、こはだの鮨(すし)は、もう居ない。捻(ひね)った処で、かりん糖売か、皆違う。こちの人は、京町の交番に新任のお巡査(まわり)さん——もっとも、角海老(かどえび)と

かのお職が命まで打込んで、上（あが）り藤の金紋のついた手車で、楽屋入をさせたという、新派の立女形（たておやま）、二枚目を兼ねた藤沢浅次郎に、よく肖（に）ていたのだそうである。

　あいびきには無理が出来る。いかんせん世の習（ならい）である。いずれは身のつまりで、遁（に）げて心中の覚悟だった、が、華厳（けごん）の滝へ飛込んだり、並木の杉でぶら下ろうなどというのではない。女形（おやま）、二枚目に似たりといえども、彰義隊（しょうぎたい）の落武者を父にして旗本の血の流れ淙々（そうそう）たる巡査である。御先祖の霊前に近く、覚悟はよいか、嬉しゅうござんす、お妻の胸元を刺貫き――洋刀（サアベル）か――はてな、そこまでは聞いておかない――返

す刀で、峨々たる巌石を背に、十文字の立ち腹を掻切って、大蘇芳年の筆の冴を見よ、描く処の錦絵のごとく、黒髪山の山裾に血を流そうとしたのであった。が、仏法僧のなく音覚束なし、誰に助けらるるともなく、生命生きて、浮世のうらを、古河銅山の書記になって、二年ばかり、子まで出来たが、気の毒にも、山小屋、飯場のパパは、煩ってなくなった。

お妻は石炭屑で黒くなり、枝炭のごとく、煤けた姑獲鳥のありさまで、おはぐろ溝の暗夜に立ち、刎橋をしょんぼりと、嬰児を抱いて小浜屋へ立帰る。……と、場所がよくない、そこらの口の悪いのが、日光が

えりを、美術の淵源地、荘厳の廚子から影向した、女菩薩とは心得ず、ただ雷の本場と心得、ごろごろさん、ごろさんと、以来かのおんなを渾名した。――嬰児が、二つ三つ、片口をきくようになると、可哀相に、いつどこで覚えたか、ママを呼んで、ごよごよちゃん、ごよちゃま。

○日月星昼夜織分――ごろからの夫婦喧嘩に、なぜ、かかさんをぶたしゃんす、もうかんにんと、ごよごよごよ、と雷の児が泣いて留める、件の浄瑠璃だけは、一生の断ちものだ、と眉にも頰にも皺を寄せたが、の

ぞめば段もの端唄(はうた)といわず、前垂掛(まえだれ)けで、朗(ほがらか)に、またしめやかに、唄って聞かせるお妻なのであった。

前垂掛――そう、髪もいぼじり巻同然で、紺の筒袖(つつッぽ)で台所を手伝いながら――そう、すなわち前に言った、浜町の鳥料理の頃、鴾氏に誘われて四五度(たび)出掛けた。お妻が、わが信也氏を知ったというはそこなのである。

が、となりも右の通りで、ばあや、同様、と遠慮をするのを、鴾画伯に取っては、外戚(がいせき)の姉だから、座敷へ招じて盃(さかずき)をかわし、大分いけて、ほろりと酔うと、誘えば唄いもし、促せば、立って踊った。家元がどうの、流儀がどうの、合方の調子が、あのの、ものの、

と七面倒に気取りはしない。口三味線(ざみせん)で間にあって、そのまま動けば、筒袖(つつッぽ)も振袖で、かついだ割箸が、柳にしない、花に咲き、さす手の影は、じきそこの隅田の雲に、時鳥(ほととぎす)がないたのである。

それでは、おなじに、吉原を焼出されて、一所に浜町へ落汐(おちしお)か、というと、そうでない。ママ、ごよごよは出たり引いたり、ぐれたり、飲んだり、八方流転の、そして、その頃はまた落込みようが深くって、しばらく行方が知れなかった。ほども遠い、……奥沢の九品仏(くほんぶつ)へ、廓(くるわ)の講中(こうじゅう)がおまいりをしたのが、あの辺の露店の、ぼろ市で、着たのはくたびれた浴衣だが、

白地の手拭を吉原かぶりで、色の浅黒い、すっきり鼻の隆いのが、朱羅宇の長煙草で、片靨に煙草を吹かしながら田舎の嬶々と、引解ものの価の掛引をしていたのを視たと言う……その直後である……浜町の鳥料理。

お妻が……言った通り、気軽に唄いもし、踊りもしたのに、一夜、近所から時借りの、三味線の、爪弾で……

丑みつの、鐘もおとなき古寺に、ばけものどしがあつまりア……

——おや、聞き馴れぬ、と思う、うたの続きが糸に

紛れた。——

きりょうも、いろも、雪おんな……

ずどんと鳴って、壁が揺れた。雪見を喜ぶ都会人でも、あの屋根を辷（すべ）る、軒しずれの雪の音は、凄（すさま）じいのを知って驚く……春の雨だが、ざんざ降りの、夜ふけの忍駒（しのびごま）だったから、かぶさった雪の、その落ちる、雪のその音か、と吃驚（びっくり）したが、隣の間から、小浜屋の主婦（おかみ）が襖（ふすま）をドシンと打ったのが、古家だから、床の壁まで家鳴（やなり）をするまで響いたのである。

お妻が、糸の切れたように、黙った。そうしてうつむいた。

「――魔が魅(さ)すといいますから――」

一番鶏(どり)であろう……鶏(とり)の声が聞こえて、ぞっとした。――引手茶屋がはじめた鳥屋でないと、深更(よふけ)に聞く、鶏の声の嬉しいものでないことに、読者のお察しは、どうかと思う。

時に、あの唄は、どんな化ものが出るのだろう。鴾氏も、のちにお京さん――細君に聞いた。と、忘れたと云って教えなかった。

「――まだ小どもだったんですもの――」

浜町の鳥屋は、すぐ潰れた。小浜屋一家は、世田ケ谷の奥へ引込んで、唄どころか、おとずれもなかったのである。

(この話の中へも、関東ビルジングの廊下へも、もうすぐ、お妻が、水を調えて降りて来よう。)

まだ少し石の段の続きがある。

――お妻とお民と京千代と、いずれも養女で、小浜屋の芸妓三人の上に、おおあねえ、すなわち、主婦を、お来といった――(その夜、隣から襖を叩いた人だが、)これに、伊作という弟がある。うまれからの廓ものといえども、見識があって、役者の下端だの、幇間の

真似（まね）はしない。書画をたしなみ骨董（こっとう）を捻（ひね）り、俳諧を友として、内の控えの、千束の寮にかくれ住んだ。……小遣万端いずれも本家持の処、小判小粒で仕送るほどの身上でない。……両親がまだ達者で、爺（じい）さん、媼（ばあ）さんがあった、その媼さんが、刎橋（はねばし）を渡り、露地を抜けて、食べものを運ぶ例で、門へは一廻り面倒だと、裏の垣根から、「伊作、伊作」――店の都合で夜のふける事がある……「伊作、伊作」――いやしくも廓の寮の俳家である。卯の花のたえ間をここに音信（おとず）るるものは、江戸座、雪中庵の社中か、抱一（ほういつ）上人の三代目、少くとも蔵前の成美（せいび）の末葉ででもあろうと思うと、違う。……

…田畝（たんぼ）に狐火が灯（とも）れた時分である。太郎稲荷（いなり）の眷属（うから）が悪戯（いたずら）をするのが、毎晩のようで、暗い垣から「伊作、伊作」「おい、お祖母（ばあ）さん」くしゃんと嚔（くしゃみ）をして消える。「畜生め、またうせた。」これに悩まされたためでもあるまい。夜あそびをはじめて、ぐれだして、使うわ、ねだるわ。勘当ではない自分で追出（おんで）て、やがて、おかち町辺に、もぐって、かつて女たちの、玉章（たまずさ）を、きみは今……などと認（したた）めた覚えから、一時、代書人をしていた。が、くらしに足りない。なくなれば、しゃっぽで、袴（はかま）で、はた、洋服で、小浜屋の店さして、揚幕ほどではあるまい、かみ手から、ぬっと来る。

（お京さんの茶の間話に聞くのである。）

鵯の細君の弱ったのは、爺さんが、おしきせ何本かで、へべったあと、だるいだるい、うつむけに畳に伸びた蹠（あしうら）を踏ませられる。……ぴたぴたと行（や）るうちに、草臥（くたび）れるから、稽古（けいこ）の時になまけるのに、催促をされない稽古棒を持出して、息杖（いきづえ）につくのだそうで。……これで戻駕籠（もどりかご）でも思出すか、善玉の櫂（かい）でも使えば殊勝だけれども、疼痛疼痛（いてていてて）、「お京何をする。」……はずんで、脊骨……へ飛上る。浅草の玉乗（たまのり）に夢中だったのだそうである。もっとも、すぺりと円い禿頭（はげあたま）の、護謨（コム）、護謨（コム）としたのには、少なからず誘惑を感じたものだと

いう。げええ。大(おおき)なおくび、――これに弱った――可厭(いや)だなあ、臭い、お爺さん、得(え)ならぬにおい、というのは手製(てづく)りの塩辛で、この爺さん、彦兵衛さん、むかし料理番の入婿だから、ただ同然で、でっち上(あげ)る。「友さん 腸(はらわた)をおいて行(ゆ)きねえ。」婆さんの方でない、安達ケ原の納戸でないから、はらごもりを割(さ)くのでない。松魚(かつお)だ、鯛だ。烏賊(いか)でも構わぬ。生麦(なまむぎ)の鯵(あじ)、佳品である。

　魚友(うおとも)は意気な兄哥(あにい)で、お来さんが少し思召(おぼしめ)しがあるほどの男だが、鳶(とび)のように魚の腹を握(つか)まねばならない。その腸(わた)を二升瓶に貯える、生葱(なまねぎ)を刻んで捏(こ)ね、七色唐

辛子を掻交(かきま)ぜ、掻交ぜ、片襷(かただすき)で練上げた、東海の鯤鯨(こんげい)をも吸寄すべき、恐るべき、どろどろの膏薬(こうやく)の、おはぐろ溝(どぶ)へ、黄袋の唾をしたような異味を、べろりべろり、と嘗(な)めては、ちびりと飲む。塩辛いきれの熟柿(じゅくし)の口で、「なむ、御先祖でぇでぇ」と茶の間で仏壇を拝むが日課だ。お来さんが、通りがかりに、ツイとお位牌(いはい)をうしろ向けにして行(ゆ)く……とも知らず、とろんこで「御先祖でえでえ。」どろりと寝て、お京や、蹠(あしうら)である。時しも、鬱金(うこん)木綿が薄よごれて、しなびた包、おちへ来て一霜(ひとしも)くらった、大角豆(ささげ)のようなのを嬉しそうに開けて、一粒々々、根附だ、玉だ、緒〆(おじめ)だと、むか

しから伝われば、道楽でためた秘蔵の小まものを並べて楽しむ処へ——それ、しも手から、しゃっぽで、袴(はかま)で、代書代言伊作氏が縁台の端へ顕(あら)われるのを見ると、そりゃ、そりゃ矢藤さんがおいでになったと、慌(あわただ)しく鬱金木綿を臍(へそ)でかくす……他なし、書画骨董の大方を、野分のごとく、この長男に吹さらわれて、わずかに痩莢(やせざや)の豆ばかりここに残った所以(ゆえん)である。矢藤は小浜屋の姓である。これで見ると、廓では、人を敬遠する時、我が子を呼ぶに、名を言わず、姓をもってするらしい。……

矢藤老人——ああ、年を取った伊作翁は、小浜屋が流転の前後——もともと世功を積んだ苦労人で、万事じょさいのない処で、将棊（しょうぎ）は素人の二段の腕を持ち、碁は実際初段うてた。それ等がたよりで、隠居仕事の寮番という処を、時流に乗って、丸の内辺の某倶楽部（くらぶ）を預って暮したが、震災のために、立寄ったその樹の蔭を失って、のちに古女房と二人、京橋三十間堀裏のバラック建（だて）のアパアトの小使、兼番人で侘（わび）しく住んだ。身辺の寒さ寂しさよ。……霜月末の風の夜（よ）や……破蒲団（やぶれぶとん）の置炬燵（おきごたつ）に、歯の抜けた頤（あご）を埋（うず）め、この奥に目あり霞（かす）めり。——徒（いたず）らに鼻が隆（たか）く目の窪（くぼ）んだ処から、

まだ娑婆気(しゃばツき)のある頃は、暖簾(のれん)にも看板にも（目あり）とかいて、煎餅(せんべい)を焼いて売りもした。「目あり煎餅」勝負事をするものの禁厭(まじない)になると、一時弘まったものである。——その目をしょぼしょぼさして、長い顔をその炬燵に据えて、いとせめて親を思出す。千束の寮のやみの夜(よ)、おぼろの夜(よ)、そぼそぼとふる小雨の夜、狐の声もしみじみと可懐(なつか)しい折から、「伊作、伊作」と女の音(ね)で、扉(とぼそ)で呼ぶ。

「婆さんや、人が来た。」「うう、お爺さん」内職の、楊枝(ようじ)を辻占(つじうら)で巻いていた古女房が、怯(おび)えた顔で——「話に聞いた魔ものではないかのう。」とおっかな吃驚(びっくり)で

扉(と)を開けると、やあ、化けて来た。いきなり、けらけらと笑ったのは大柄な女の、くずれた円髷(まるまげ)の大年増、尻尾(しっぽ)と下腹は何を巻いてかくしたか、縞小紋(しまこもん)の糸が透いて、膝へ紅裏(こううら)のにじんだ小袖を、ほとんど素膚に着たのが、馬ふんの燃える夜の陽炎(かげろう)、ふかふかと湯気の立つ、雁(がん)もどきと、蒟蒻(こんにゃく)の煮込のおでんの皿盛を白く吐く息とともに、ふうと吹き、四合罎(しごうびん)を片手に提げて

「ああ敷居が高い、敷居が高い、（鳥居さえ飛ぶ癖に）階子段(はしごだん)で息が切れた。若旦那、お久しゅう。てれかくしと、寒さ凌(しの)ぎに夜(よ)なしおでんで引掛(ひっか)けて来たけれど、おお寒い。」と穴から渡すように、丼をのせるとともに、

その炬燵へ、緋の襦袢むき出しの膝で、のめり込んだのは、絶えて久しい、お妻さん。……「――わかたなは、あんやたい――」若旦那は、ありがたいか、暖かな、あの屋台か、五音が乱れ、もう、よいよい染みて呂律が廻らぬ。その癖、若い時から、酒は一滴もいけないのが、おでんで濃い茶に浮かれ出した。しょぼしょぼの若旦那。

　さて、お妻が、流れも流れ、お落ちも落ちた、奥州青森の裏借屋に、五もくの師匠をしていて、二十も年下の、炭屋だか、炭焼だかの息子と出来て、東京へ舞戻り、本所の隅っ子に長屋で居食いをするうちに、こ

の年齢（とし）で、馬鹿々々しい、二人とも、とやについて、どっと寝た。青森の親元へ沙汰（さた）をする、手当薬療、息子の腰が立つと、手が切れた。むかいに来た親は、善知鳥（うとう）、うとうと、なきながら子をくわえて皈（かえ）って行（ゆ）く。片翼（かたは）になって大道に倒れた裸の浜猫を、ぼての魚屋が拾ってくれ、いまは三河島辺で、そのばさら屋の阿媽（おっかあ）だ、と煮こごりの、とけ出したような、みじめな身の上話を茶の伽（とぎ）にしながら――よぼよぼの若旦那が――さすがは江戸前でちっともめげない。「五もくの師匠は、かわいそうだ。お前は芸は出来るのだ。」「武芸十八般一通り。」と魚屋の阿媽だけ、太刀の魚（うお）ほど

反(そ)って云う。「義太夫は」「ようよう久しぶりお出しなね。」と見た処、壁にかかったのは、蝙蝠傘(こうもりがさ)と箒(ほうき)ばかり。お妻が手拍子、口三味線(ざみせん)。

若旦那がいい声で、

夢が、浮世か、うき世が夢か、夢ちょう里に住みながら、住めば住むなる世の中に、よしあしびきの大和路や、壺坂の片ほとり土佐町に、沢市という座頭あり。……

妻のお里はすこやかに、夫の手助け賃仕事……

とやりはじめ、唄でお山へのぼる時分に、おでん屋

へ、酒の継足しに出た、というが、二人とも炬燵の谷へ落込んで、朝まで寝た。――この挿話に用があるのは、翌朝かえりがけのお妻の態度である。りりしい眉毛を、とぼけた顔して、

「――少しばかり、若旦那。……あまりといえば、おんぼろで、伺いたくても伺えなし、伺いたくて堪らないし、損料を借りて来ましたから、肌のものまで。……ちょっと、それにお恥かしいんだけど、電車賃……」

(お京さんから、つい去年の暮の事だといって、久しく中絶えたお妻のうわさを、最近に聞いていた。)

お妻が、段を下りて、廊下へ来た。と、いまの身なりも、損料か、借着らしい。

「さ、お待遠様。」

「難有(ありがた)い。」

「灰皿——灰落しらしいわね。……廊下に台のものッて寸法にいかないし、遣手(やりて)部屋というのがないんだもの、湯呑みの工面がつきやしません。……いえね、いよいよとなれば、私は借着の寸法だけれど、花柳(はなやぎ)の手拭(てぬぐい)の切立てのを持っていますから、ずッぷり平右衛門で、一時凌(しの)ぎと思いましたが、いい塩梅(あんばい)にころがっていましたよ。大丈夫、ざあざあ洗って洗いぬいた上、

もう私が三杯ばかりお毒見が済んでいますから。ああ、そんなに引かぶって、襟が冷くありませんか、手拭をあげましょう。」

「一滴だってこぼすものかね、ああ助かった。――いや、この上欲しければ、今度は自分で歩行けそうです。――助かった。恩に被ますよ。」

「とんでもない、でも、まあ、嬉しい。」

「まったく活返った。」

「ではその元気で、上のおさらいへいらっしゃるか。」

そこまで、おともをしてもよござんす。」

「で、演っていますかね。三味線の音でも聞こえます

か。」

「いいえ。」

「途中で、連中らしいのでも見ませんか。」

「人ッこ一人、……大びけ過ぎより、しんとして薄気味の悪いよう。」

「はてな、間違(まちがい)ではなかろうが、……何しろ、きみは、ちっともその方に引っかかりはないのでしたね。」

「ええ、私は風来ものの大気紛れさ、といううちにも、そうそう。」

中腰の膝へ、両肱(りょうひじ)をついた、頬杖(ほおづえ)で。

「じかではなくっても――御別懇の鴾先生の、お京さ

んの姉分だから、ご存じだろうと思いますが……今、芝、明舟町（あけふねちょう）で、娘さんと二人で、お弟子を取っています、お師匠さん、……お民さんのね、……まあ、先生方がお聞きなすっては馬鹿々々しいかも知れませんが、……目を据える、生命（いのち）がけの事がありましてね、その事で、ちょっと、切ッつ、はツつもやりかねないといった勢（いきおい）で、だらしがないけども、私がさ、この稽古棒（よっかけて壁にあり）を槍（やり）、鉄棒（かなぼう）で、対手方（あいて）へ出向いたんでござんすがね、――入費（いりよう）はお師匠さん持だから、乗込みは、ついその銀座の西裏まで、円タクさ。

――呆（あき）れもしない、目ざす敵（かたき）は、喫茶店、カフェー

なんだから、めぐり合うも捜すもない、すぐ目前(めのまえ)に顕(あら)われました。ところがさ、商売柄、ぴかぴかきらきらで、廓(くるわ)の張店(はりみせ)を硝子張(がらすばり)の、竜宮づくりで輝かそうていったのが、むかし六郷様の裏門へぶつかったほど、一棟、真暗(まっくら)じゃありませんか。拍子抜とも、間抜けとも。……お前さん、近所で聞くとね、これが何と……いかに業体(ぎょうてい)とは申せ、いたし方もこれあるべきを、裸で、小判、……いえさ、銀貨を、何とか、いうかどで……営業おさし留めなんだって。……

出がけの意気組が意気組だから、それなり皈(かえ)るのも詰りません。隙(ひま)はあるし、蕎麦屋(そばや)でも、鮨屋(すしや)でも気に

向いたら一口、こんな懐中合（ふところあい）も近来めったにない事だし、ぶらぶら歩いて来ましたところが、——ここの前さ、お前さん、」

と低いが壁天井に、目を上げつつ、

「角海老に似ていましょう、時計台のあった頃の、……ちょっと、当世ビルジングの御前様に対して、こういっては相済まないけども。……熟（じっ）と天頂（てっぺん）の方を見ていますとね、さあ、……五階かしら、屋の棟に近い窓に、女の姿が見えました。部屋着に、伊達巻といった風で、いい、おいらんだ。……串戯（じょうだん）じゃない。今時そんな間違いがあるものか。それとも、おさらいの看板

が見えるから、衣裳をつけた踊子が涼んでいるのかも分らない、入って見ようと。」

「ああ、それで……」

「でござんさあね。さあ、上っても上っても。……私も可厭になってしまいましてね。とんとんと裏階子を駆下りるほど、要害に馴れていませんから、うろうろ気味で下りて来ると、はじめて、あなた、たった一人。」

「だれか、人が。」

「それが、あなた、こっちが極りの悪いほど、雪のように白い、後姿でもって、さっきのおいらんを、丸剥にしたようなのが、廊下にぼんやりと、少し遠見に…

…おや！　おさらいのあとで、お湯に入る……ツてこれが、あまりないことさ。おまけに高尾のうまれ土地だところで、野州塩原の温泉じゃないけども、段々の谷底に風呂場でもあるのかしら。ぼんやりと見てる間に、扉だか部屋だかへ消えてしまいましたがね。」

「どこのです。」

「ここの。」

「ええ。」

「それとも隣室（となり）だったかしら。何しろ、私も見た時はぼんやりしてさ、だから、下に居なすった、お前さんの姿が、その女が脱いで置いた衣（き）もののぐらいの場所に

ありましてね。」
信也氏は思わず内端(うちわ)に袖を払った。
「見た時は、もっとも、気もぼっとしましたから。今思うと、――ぞっこん、これが、目にしみついていますから、私が背負(しょ)っている……雪おんな……」
(や、浜町の夜更(よふけ)の雨に――
……雪おんな……
唄いさして、ふと消えた。……)
「?……雪おんな。」
「ここに背負っておりますわ。それに実(ほん)に、見事な絵でござんすわ。」

と、肩に斜（ななめ）なその紫包を、胸でといた端もきれいに、片手で捧げた肱（ひじ）に靡（なび）いて、衣紋（えもん）も褄（つま）も整然（きちん）とした。

「絵ですか、……誰の絵なんです。」

「あら、御存じない？……あなた、鴇先生のじゃありませんか。」

「ええ、鴇君が、いつね、その絵を。」

（いままだ、銀座裏で飲んでいよう、すました顔して、すくすくと銚子（ちょうし）の数を並べて。）

「つい近頃だと言いますよ。それも、わけがありましてね、私が今夜、——その酒場へ、槍、鉄棒で押掛けたといいました。やっぱりその事でおかきなすったん

だけれどもね。まあ、お目にかけますわ……お待なさい。ここは、廊下で、途中だし、下へ出た処で、往来と……ああ、ちょっとこの部屋へ入りましょうか。」

「名札はかかっていないけれど、いいかな。」

「あき店(だな)さ、お前さん、田畝(たんぼ)の葦簾張(よしずばり)だ。」

と云った。

「ぬしがあっても、夜の旅じゃ、休むものに極(きま)っていますよ。」

「しかし、なかに、どんなものか置いてでもあると、それだとね。」

「御本尊のいらっしゃる、堂、祠(ほこら)へだって入りましょ

う。……人間同士、構やしません。いえ、そこどころじゃあない、私は野宿をしましてね、変だとも、おかしいとも、何とも言いようのない、ほほほ、男の何を飾った処へ、のたれ込んだ事がありますわ。野中のお堂さ、お前さん。……それから見りゃ、――おや開かない、鍵が掛(かか)っていますかね、この扉は。」

「無論だろうね。」

「圧(お)してみて下さい。開きません？　ああ、そうね、あなたがなすって［＃「なすって」は底本では「なすって」」は御身分がら……お待ちなさいよ、おつな呪禁(まじない)がありますから。」

懐紙（ふところがみ）を器用に裂くと、端を捻（ひね）り、頭を抓（つま）んで、

「てるてる坊さん、ほほほ。」

すぼけた小鮹（こだこ）が、扉の鍵穴に、指で踊った。

「いけないね、坊さん一人じゃあ足りないかね。そら、もう一人、出ました。また一人、もう一人。これじゃ長屋の井戸替だ。あかないかね。そんな筈はないんだけれど、――雨をお天気にする力があるなら、掛けた鍵なぞわけなしじゃあないか。しっかりおしよ。」

ぽんと、丸めた紙の頭を順にたたくと、手だか足だか、ふらふらふらふらと刎（は）ねる拍子に、何だか、けばだった処が口に見えて、尖（とが）って、目皺（めじわ）で笑って、揃って騒

ぐ。
「いえね、お前さん出来るわけがありますの。……その野宿で倒れた時さ——当にして行った仙台の人が、青森へ住替えたというので、取りつく島からまた流れて、なけなしの汽車のお代。盛岡とかいう処で、ふっと気がつくと、紙入がない、切符がなし。まさか、風体を視(み)たって箱仕事もしますまい。間抜けで落したと気がつくと、鉄道へ申し訳がありません。どうせ、恐入るものをさ、あとで気がつけば青森へ着いてからでも御沙汰(おさた)は同じだものを、ちっとでも里数の少い方がお詫(わび)がしいいだろうでもって、馬鹿さが堪(たま)らない。お

前さん、あたふた、次の駅で下りましたがね。あわてついでに改札口だか、何だか、ふらふらと出ますとね、停車場も汽車も居なくなって、町でしょう、もう日が、とっぷり暮れている。夜道の落人、ありがたい、網の目を抜けたと思いましたが、さあ、それでも追手が掛(かか)りそうで、恐い事——つかまったって、それだけだものを、大した御法でも背いたようでね。ええ、だもんだから、腹がすけば、ぼろ撥(ばち)一挺(ちょう)なくっても口三味線で門附けをしかねない図々しい度胸なのが、すたすたもので、町も、村も、ただ人気のない処と遁(に)げましたわ、知らぬ他国の奥州くんだり、東西も弁(わきま)えない、心

細い、畷道（なわてみち）。赤い月は、野末に一つ、あるけれど、もと末も分らない、雲を落ちた水のような畝（うね）った道を、とぼついて、堪らなくなって——辻堂へ、路傍（みちばた）の芒（すすき）を分けても、手に露もかかりません。いきれの強い残暑のみぎり。

まあ、のめり込んだ御堂の中に、月にぼやっと菅笠ほどの影が出来て、大きな梟（ふくろう）——また、あっちの森にも、こっちの林にも鳴いていました——その梟が、顱巻（はちまき）をしたような、それですよ。……祭った怪しい、御本体は。——

この私だから度胸を据えて、褌（ふんどし）が紅（あか）でないばかり、

おかめが背負(しょ)ったように、のめっていますと、（姉さん一緒においで。――）そういって、堂のわきの茂りの中から、大方、在方(ざいかた)の枝道を伝って出たと見えます。うす青い縞(しま)の浴衣だか単衣(ひとえ)だか、へこ帯のちょい結びで、頬被(ほおかぶり)をしたのが、菅笠をね、被(かぶ)らずに、お前さん、背中へ掛けて、小さな風呂敷包みがその下にあるらしい……から脛(すね)の色の白いのが素足に草鞋(わらじ)ばきで、竹の杖を身軽について、すっと出て来てさ、お前さん。」

お妻は、踊の棒に手をかけたが、

「……実は、夜食をとりはぐって、こっちも腹がすいて堪らない。堂にお供物の赤飯でもありはしないか、

とそう思って覗(のぞ)いて、お前を見たんだ、女じゃ食われない、食いもしようが可哀相(かわいそう)だ、といって笑うのが、まだ三十前、いいえ二十六七とも見える若い人。もう少し辛抱おしと、話しながら四五町、土橋を渡って、榎(えのき)と柳で暗くなると、家(うち)があります。その取着(とッつき)らしいのの表戸を、きしきし、その若い人がやるけれど、開きますまい、あきません。その時さ、お前さんちょっと捜して、藁(わら)すべを一本見つけて。」

お妻は懐紙の坊さん（その言(ことば)に従う）を一人、指につまんでいった。あと連は、掌(たなそこ)の中に、こそこそ縮まる。

「それでね、あなた、そら、かなの、※［＃「耳」を崩した変体仮名「に」、136-11］形の、その字の上を、まるいように、ひょいと結んで、（お開け、お開け。）と言いますとね。」

信也氏はその顔を瞻（みまも）って、黙然として聞いたというのである。

「――苦もなく開いたわ。お前さん、中は土間で、腰掛なんか、台があって……一膳（いちぜん）めし屋というのが、腰障子の字にも見えるほど、黒い森を、柳すかしに、青く、くぐって、月あかりが、水で一漉（こ）し漉したように映ります。

目も夜鳥ぐらい光ると見えて、すぐにね、あなた、丼、小鉢、お櫃を抱えて、――軒下へ、棚から落したように並べて、ね、蚊を払い（おお、飯はからだ。）（お菜漬だけでも、）私もそこへ取着きましたが、きざみ昆布、雁もどき、鰊、焼豆府……皆、ぷんとむれ臭い。（よした、よした、大餒えに餒えている。この温気だと、命仕事だ。）（あなたや……私はもう我慢が出来ない、お酒はどう。）……ねえ、お前さん。――

（酒はいけない。飢い時の飯粒は、天道もお目こぼし、姉さんが改札口で見つからなかったも同じだが、酒となると恐多い……）と素早いこと、さっさ、と片づけ

て、さ、もう一のし。

今度はね、大百姓……古い農家の玄関なし……土間の広い処へ入りましたがね、若い人の、ぴったり戸口へ寄った工合で、鍵のかかっていないことは分っています。こんな蒸暑さでも心得は心得で、縁も、戸口も、雨戸はぴったり閉っていましたが、そこは古い農家だけに、節穴だらけ、だから、覗（のぞ）くと、よく見えました。土間の向うの、大（おおき）い炉のまわりに女が三人、男が六人、ごろんごろんごろん寝ているのが。

若い人が、鼻紙を、と云って、私のを——そこらから拾って来た、いくらもあります、農家だから。——

藁すべで、前刻(さっき)のような人形を九つ、お前さん、――そこで、その懐紙を、引裂いて、ちょっと包(くる)めた分が、白くなるから、妙に三人の女に見えるじゃありませんか。

敷居際へ、――炉端のようなおなじ恰好(かっこう)に、ごろんと順に寝かして、三度ばかり、上から掌(てのひら)で俯向(うつむ)けに撫(な)でたと思うと、もう楽なもの。

若い人が、ずかずか入って、寝ている人間の、裾(すそ)だって枕許(まくらもと)だって、構やしません。大まかに掻捜して、御飯、お香こう、お茶の土瓶まで……目刺を串ごと。旧の盆過ぎで、苧殻(おがら)がまだ沢山あるのを、へし折って、

まあ、戸を開放しのまま、敷居際、燃しつけて焼くんだもの、呆れました。（門火(かどび)、門火。）なんのと、呑気(のんき)なもので、（酒だと燗(かん)だが、こいつは死人焼(しびとやき)だ。このしろでなくて仕合せ、お給仕をしようか。）……がつがつ私が食べるうちに、若い女が、一人、炉端で、うむと胸も裾もあけはだけで起上りました。あなた、その時、火の誘った夜風で、白い小さな人形がむくりと立ったじゃありませんか。ぽんと若い人が、その人形をもろに倒すと、むこうで、ばったり、今度は、うつむけにまた寝ました。

驚きましたわ。藁を捻（ひね）ったような人形でさえ、そんな業（わざ）をするんだもの。……活きたものは、いざとなると、どんな事をしようも知れない、可恐（おそろし）いようね、ええ？……――もう行（や）ってる、寝込（ねごみ）の御飯をさらって死人焼で目刺を――だって、ほほほ、まあ、そうね……

いえね、それについて、お前さん――あなたの前だけども、お友だちの奥さん、京千代さんは、半玉の時分、それはいけずの、いたずらでね、なかの妹（お民をいう）は、お人形をあつかえばって、屏風（びょうぶ）を立てて、友染の掻巻（かいまき）でおねんねさせたり、枕を二つならべたり、

だったけれど、京千代と来たら、玉乗りに凝ってるから、片端(かたっぱし)から、姉様(あねさま)も殿様も、紅(あか)い糸や、太白で、ちょっとかがって、大小護謨毬(ゴムまり)にのッけて、ジャズ騒ぎさ、——今でいえば。

主婦(おかみ)に大目玉をくった事があるんだけれど、弥生(やよい)は里の雛遊(ひなあそ)び……は常磐津(ときわづ)か何かのもんくだっけ。お雛様を飾った時、……五人囃子(ばやし)を、毬にくッつけて、ぽんぽんぽん、ころん、くるくるなんだもの。

ところがね、真夜中さ。いいえ、二人はお座敷へ行っている……こっちはお茶がちだから、お節句だというのに、三人のいつもの部屋で寝ました処、枕許が賑(にぎや)か

だから、船底を傾けて見ますとね、枕許を走ってる、長い黒髪の、白いきものが、球に乗って、……くるりと廻ったり、うしろへ反ったり、前へ辷（すべ）ったり、あら、大きな蝶が、いくつも、いくつも雪洞（ぼんぼり）の火を啣（くわ）えて踊る、ちらちら紅い袴（はかま）が、と吃驚（びっくり）すると、お囃子が雛壇で、目だの、鼓の手、笛の口が動くと思うと、ああ、遠い高い処、空の座敷で、イヤアと冴えて、太鼓の掛声、それが聞覚えた、京千代ちい姐（ねえ）。

……ものの形をしたものは、こわいように、生きていますわね。

——やがてだわね、大きな樹の下の、畷(なわて)から入口の、牛小屋だが、廐(うまや)だかで、がたんがたん、騒しい音がしました。すっと立って若い人が、その方へ行きましたっけ。もう返った時は、ひっそり。苧殻(おがら)の燃(もえ)さし、藁の人形を揃えて、くべて、逆縁ながらと、土瓶をしたんで、ざあ、ちゅうと皆消えると、夜あらしが、颯(さっ)と吹いて、月が真暗(まっくら)になって、しんとする。(行きましょう、行きましょう。)ぞっと私は凄(すご)くなって、若い人の袖を引張(ひっぱ)って、見はるかしの田畝道へ。……ほっとして、

(聞かして下さいまし、どんなお方)。

（私か。）

（あなた。）

（森の祠の、金勢明神(こんせいみょうじん)。）

（…………）

（男の勢だ。）

（キャア。）

話に聞いた振袖新造(ふりそでしんぞ)が——台のものあらしといって、大びけ過ぎに女郎屋の廊下へ出ましたと——狸に抱かれたような声を出して、夢中で小一町駆出しましたが、振向いても、立って待っても、影も形も見えません、もう朝もやが白んで来ました。

それなの、あなた、ただいま行いました、小さなこの人形たちは。」

掌（たなそこ）にのせた紙入形を凝（じっ）とためて、

「人数（にんず）が足りないかしら、もっとも九ツ坊さんと来りゃあ、恋も呪（のろい）もしますからね。」

で、口を手つだわせて、手さきで扱（しご）いて、懐紙（ふところがみ）を、蚕（かいこ）を引出すように数を殖（ふや）すと、九つのあたまが揃って、黒い扉の鍵穴へ、手足がもじゃ、もじゃ、と動く。……

…信也氏は脇の下をすくめて、身ぶるいした。

「だ……」

がっかりして、

「めね……ちょっと……お待ちなさいよ。」

信也氏が口をきく間もなく、

「私じゃ術がきかないんだよ。こんな時だ。」

何をする。

風呂敷を解いた。見ると、絵筒である。お妻が蓋（ふた）を抜きながら、

「雪おんなさん。」

「…………」

「あなたがいい、おばけだから、出入りは自由だわ。」

するすると早や絹地を、たちまち、水晶の五輪塔を、月影の梨の花が包んだような、扉に白く絵の姿を半ば

映した。

「そりゃ、いけなかろう、お妻さん。」

鴇の作品の扱い方をとがめたのではない、お妻の迷(まよい)をいたわって、悟そうとしたのである。

「いいえ、浅草の絵馬の馬も、草を食べたというじゃありませんか。お京さんの旦那だから、身贔屓(みびいき)をするんじゃあないけれど、あれだけ有名な方の絵が、このくらいな事が出来なくっちゃ。」

絵絹に、その面影が朦朧(もうろう)と映ると見る間に、押した扉が、ツトおのずから、はずみにお妻の形を吸った。

「ああ、吃驚(びっくり)、でもよかった。」

と、室（へや）の中から、
「そら、御覧なさい、さあ、あなたも。」
どうも、あけ方が約束に背いたので、はじめから、鍵はかかっていなかったらしい。ただ信也氏が手を掛けて試みなかったのは、他に責（せめ）を転じたのではない。空室（あきま）らしい事は分っていたから。しかし、その、あえてする事をためらったのは、卑怯（ひきょう）ともいえ、消極的な道徳、いや礼儀であった。
つい信也氏も誘われた。
する事も、いう事も、かりそめながら、懐紙の九ツの坊さんで、力およばず、うつくしいばけものの、雪

おんな、雪女郎の、……手も袖もまだ見ない、膚（はだ）であ
いた室（へや）である。
一室（ひとま）――ここへ入ってからの第二の……第三の妖（よう）は
……………………

昭和八（一九三三）年七月

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房
　　1996（平成8）年6月24日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十三巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年6月22日発行
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2006年3月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。